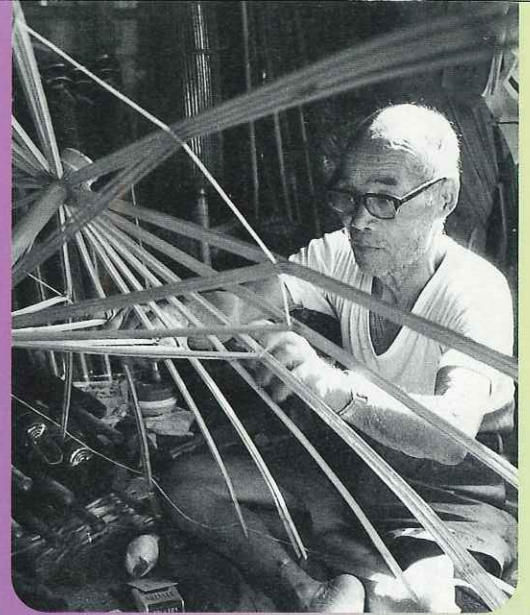


富士・沼津・三島3市博物館共同企画展

くらしを支えた 職人



●会期
平成12年 **7/2** (日) ~ **9/3** (日)

●会場
三島市郷土資料館 (市立公園 楽寿園内)

●主催
富士・沼津・三島3市博物館連絡協議会

今後の巡回予定

平成12年 **9/12** (火) ~ **11/12** (日)

富士市立博物館 ☎ 0545 (21) 3380

平成12年 **11/21** (火) ~ 平成13年 **2/25** (日)

沼津市歴史民俗資料館 ☎ 0559 (32) 6266

くらしを支えた職人



畳 職 人



桶 職 人



下 駄 職 人



籠 職 人

第二次世界大戦を境に、その前とその後の町や村の様子を比べると、特にその暮らしぶりは大きく様変わりしました。戦後、日本経済の成長が右上がりの勢いを示し始めた頃もまだしばらくは、それぞれの町には、鍛冶屋、畳屋、ブリキ屋、桶屋、下駄屋、籠屋、大工、豆腐屋など、私たちの日常の暮らしに欠かすことのできない手仕事を業とする職人が健在でした。

その後、いままで経験をしたことのないほどの勢いで経済成長を続けると、私たちの心に「使い捨て」や「大量生産、大量消費」がいつの間にかはびこり、便利さだけがもてはやされる社会となったように思います。

鍛冶屋もそうですが、桶屋、下駄屋などの技術は、江戸時代以来、いやそれよりも遙か悠久の昔から、連綿として、親から子へ、子から孫へ、さらには親方から弟子にと引き継がれてきました。

その職人が町から消えました。

明治2年(1869)の記録を見ると沼津宿(後の沼津町)は6,777人の人口をようし、その中にいわゆる職人が323人数えられました。

圧倒的に多いのは大工の61人でおよそ1%が該当しました。続いて多いのが仕立屋と綿打ち屋でそれぞれ34人で0.5%ほどいました。そして鍛冶屋、左官屋、桶屋、染物屋、足袋屋がそれぞれ10人以上町の職人として、町なかで暮らしていました。

一方、町の店屋を見ると魚の間屋や仲買、小売り屋が群を抜いて多く、雑穀屋、荒物屋の倍以上を商っていました。

この記録で見ると沼津宿には籠職人(竹細工師)、下駄職人がそれぞれ4人と記録されています。下駄の場合には草履職人が8人ほど数えられているので、もしかしたら、草履の利用者の方が多かったということでしょうか。この宿に籠職人(竹細工師)が4人というのはいかにも寂しい気がします。

山梨県の河口湖畔の村、勝山村はかつて竹籠をよく編みました。そこでは細かな目で見事に編み上げたザルや籠などを、遠く沼津あたりに行商に行きました。ザルや籠を沼津の町で売りさばき、それで魚や塩を買い込み、それも道々売り払いながら勝山村に帰ったといいます。こうした行商によるザルや籠だけで沼津の町のザルや籠の需要がすべて賄えたとも思えませんが、それを補うかのように荒物屋が67軒と多くありました。

家の建築や家具などの指物をのぞくと、日常生活の中では、ザルや籠はもとより、桶、樽、生地、衣服などは生活必需品でした。仕立屋や綿打ち、足袋師、染め物師、畳師、表具師、草履師、鍛冶師、左官などはいつも身近な存在でした。

なかには、時代の流れの中でいまにそぐわないものとなったものもあるかもしれませんが、職人は確実に町から消えました。

沼津の職人

明治2年(1869)の、今風にいえば最初の国勢調査ともいえる「駿河国沼津政表」(世良太一編「杉先生講演集(全)」:1872)を見ると、当時の沼津宿(町村制がしかれると沼津町となった)には42種類の手仕事に従事する人が323人記録されています。そして795人が84種類の商いを営んでいました。

それを見ると、例えば、桶屋を営むものが4人と記録されていますが、桶職人も4人となっているので、桶職人がそのまま桶屋を営んでいたことが伺えます。また、下駄師(職人)は4人と記録されていますが、下駄屋は3人です。この記録に誤りがなければ、下駄師(職人)4人のうち、3人は下駄屋も商っていたが、残る1人はもっぱらの職人で、それで生計を立てているとすれば、仕上がった下駄を下駄屋や例えば荒物屋などに卸していたと考えられます。このことを考慮すれば、明治の初期の沼津の職人のなかには、自ら店舗を構えて製品を商うものと、もっぱら製品作りに励み、あえて店舗を持たず、商い屋に卸すという2者が存在したことになります。もっともこうした方法は、おそらく職人が確立した中世頃から徐々に見られた方向であると思われます。

職人の仕事が庶民の生活と密着するのはいつ頃のことだかよくわかりませんが、少なくとも昭和30年代頃までは、私たちの周りには、私たちの生活と密接に関わった職人がいつも見られました。

籠屋、桶屋、大工、仕立屋、綿打ち、石工、ブリキ屋、建具屋そして豆腐屋など、私たちの日常生活は、家の周りの職人の技術に支えられていたといえる状況にありました。

その点では沼津の町も例外ではありませんが、海と関わったこの町を特徴づける船大工と江戸時代以来、この町の風土も存在理由となったと思われる沼津垣、そして漁具の中でも特色があったイキョウ作りなどで沼津の職人を代表させ、その一端を紹介したいと思います。



船大工

「駿河国沼津政表」で4人となっている船大工は、伝統的な和船型の木造船を造っていたとみられます。漁船には、海岸線や漁法に適した様々な形式があり、沼津の沿岸部だけでも30種類余りにもなりました。船大工の技術は、船の曲線や曲面を作り出したり、水が漏らないように材木を密着させたりする独自のもので、鋸や船釘をはじめとする道具類も用途に応じて種類が多く、特徴的でした。



沼津垣作り

沼津垣は細い箱根竹を材料とした網代垣で、著名人や資産家の別荘にも多用されたことから全国的に有名になりました。長さが165cmほどで径が1.5cmほどの女竹を1本1本丁寧に磨き、12本を1組として斜めに網代状に編みます。2~3人が呼吸を合わせてほとんど手作業で行うため、チームワークが大切になります。もちが良く、一度作れば一生ものといわれました。



イキョウ作り

竹で作られた漁具のうち、直径が2m近くあり最も大きかったものがイキョウで、カツオの餌になるイワシの生簀籠でした。漁場で捕ったイワシを生簀まで運び、生簀で養ったイワシをカツオ船まで運ぶのに用いました。大正時代に動力船が発達しカツオ漁が盛んになると、特に大量の需要が生じました。静浦の多比には、イキョウ作りを専門にする職人が15~20人もいて、石切場の跡の穴を仕事場にして注文に応じていました。

三島の職人

三島は三嶋大社の門前町として賑わい、江戸時代には東海道の宿場として繁栄を極め、明治以後は北伊豆の経済の中心地でした。

このため昭和30年代まで、暮らしに関わる職人は三島の小路や門前などに多く住んでいました。三島の職人の中でも特色あるのは傘屋と紺屋で、いずれも湧水に恵まれた三島の水を活用した家内工業です。



和傘職人



紺屋(染料を引く)



紺屋(川に布をさらす)

ぶせする)と細かい手作業が続きます。特に糊作りは重要で、夏は固く冬は柔らかめに加減して作り、エミ(ひび)が入らないようにします。

いよいよ布を染める前に、布の下ごしらえとしてふのりを裏へ塗り、包丁で掻き、布の繊維のけばを取ります。染料がよく染まるように、また裏に染み過ぎないようにするためです。染料を引くのは天気の日に行います。日にあたるほうが発色がいいのです。「紺屋の仕事はお天気次第」と言ったものです。染め上がった布は川にさらし糊を落とし、最後に水洗いして、縫製へまわし出来上がりです。「紺屋の仕事は一つでもおろぬくとだめ」と、ていねいな仕事が求められ、一方「紺屋の仕事はさじ加減」といわれ季節により、天気により材料の分量を微妙に変えているのです。

和傘職人

三島の和傘は、明治初期に江戸から移住した人々によって始められたと伝えられます。昭和初期には主な親方が20人、職人は60人程度いました。戦後は旧国分町(広小路駅西側一帯)や水上(水泉園から三嶋大社の間)におよそ60軒の傘屋が集中しており、小浜用水や桜川の水を利用して竹を水につけていたものです。

和傘の製作は骨師・貼り師・仕上げ師の3段階に分業され、骨師は真竹から親骨・子骨を切り出し、穴を開け、組み立てます。貼り師は和紙を貼り、仕上げ師は絵付けをし、渋油を塗り、籐を巻き、金具をつけました。それぞれの職人は一人前になるまで5年程度かかりました。腕のいい貼り師でも1日12~13本作るのがやっとだったといえます。昭和30年代まで水上や広小路駅西側の田には和傘を干す光景がよく見られました。

三島産の傘は他の産地に比べしっかり作られていたため、高値で取引されたと言われます。

市内で最も大きな傘屋だった世古傘屋(広小路町)では職人を15~16人雇い、月に4000本製作して、東京、千葉、神奈川、山梨、伊豆へ出荷していました。洋傘に押され三島最後の碓井傘屋も10年前に店を閉じました。

紺屋

昭和2年(1927)には、三島に紺屋(染物屋)が22軒あり分業体制で染物を仕上げていました。下絵師・糊付け屋・染物屋の順にまわり、染められた後、湧水の流れる水路に布をさらして糊を落とします。

現在一軒残る紺屋「遠州屋」(東本町)は下絵から仕上げまで全ての工程を行っています。作業は布づくり(生地を洗濯ソーダで煮る)から始まり、糊づくり(もち粉・米糠・石灰を混ぜ、だんごにして煮、これを攪拌してこねる)、下絵(原画を描き拡大機で伸ばす)、型づくり(下絵をクラフト紙・渋紙に写し、つなぎを残しながら切り抜く)、糊づけ(型を置き糊をふせる、または筒描きで糊

曲げ物職人



セイロを作る

富士の職人

富士山の南西麓に広がる富士は、駿河湾に接する漁村から富士山麓の最北の山村まで、その標高差は大きく、約800mにもなります。人々はハマ、タバシヨ、マチ、ヤマガなどでそれぞれの地に適した暮らしを営み、お互いの暮らしにないものを求め合ってきました。

特に江戸時代に宿場町として発展した吉原には、右の表のように多種多様の職人が見られ、その技術をハマやヤマガなど様々な地に住む人々に提供していたようです。このほか、吉原から沼津に至る根方街道や、吉原から大宮（現・富士宮）に至る大宮街道など主要な街道筋には、桶屋、鍛冶屋といった暮らしに欠かすことのできない職人が点在していたようです。

手漉和紙職人

清涼な水と富士山麓に自生する三極をもとに、「駿河半紙」を漉き続けてきた旧富士郡。そこには既に明確な分業体制が確立していました。

明治17年（1884）にまとめられた『皇国地誌』によると、富士宮・富士市域は、主に原料生産をするカゾヤ(楮屋)、芝川町は漉きあげをするスキヤ(漉屋)などの職人が村単位で存在していました。

現富士市域では、明治20年代に今泉村の湧水地・通称「ガマ」を中心にした田宿川沿いに手漉和紙工場群が成立すると、紙漉職人の不足を補う目的で手漉和紙伝習所が設立され、手漉和紙職人は急増しました。しかし、明治23年（1890）の富士製紙会社の進出により、和紙抄紙の機械化が進むと、手漉職人はその数を急激に減らしていきました。



▲今泉ガマの紙漉場（鈴木富男氏作図）

改訂 明治末期の吉原町の地図と「思い出」に見られる職種

職人	人数	職人	人数
菓子駄	18	掛傘	2
下駄	11	唐篩	2
足袋	10	はんこ	2
建具	9	パシ	1
豆腐	8	絵巻	1
畳	7	竹行	1
桶	6	井	1
ブリキ	6	靴	1
大工	4	素麺	1
左官	4	髪結	1
石工	4	籠	1
ランプ	3	絞	1
鍛冶	3	目立	1
紺表	3	唐	1
時計	3	ガラス	1
蒲提	3	コウモリ	1
提灯	3	べっこう	1
し	3	箱	1
大工	2	金ぐつ	1
宮大工	2	だるま	1
櫛	2	花火	1
研ぎ	2	井戸	1
紙漉	2		

だるま職人

だるまを含む張子細工は、製紙（和紙）の際に出る原料くずを漉いた紙でつくられます。かつては富士市今宮の浅間神社周辺に生えていた朴の木から木型を作り、張子紙をはりつけて成型していました。

1年かけてつくられただるまは、毎年初春の毘沙門天大祭などで縁起物として販売されます。



▲富士のだるま職人

かしのくさ

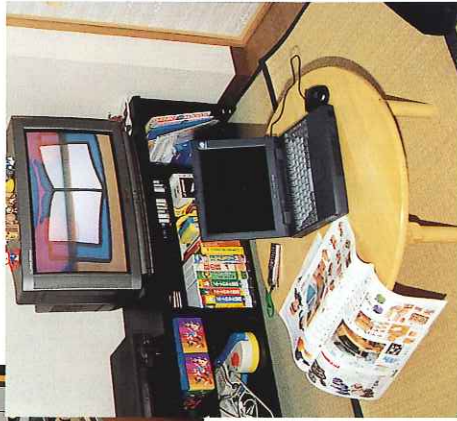
外立ますみ画



今のくらし



写真上・右：集合住宅のくらし
(平成12年、富士市)



大量生産・大量消費の時代が到来したと同時に、職人の姿が町から消えていきました。かつて職人がつくった籠や桶は、ステレンス製のザルやプラスチック製の桶にとっかわり、合理的な流通システムにのって大型スーパーなどで手軽に手に入るようになりました。かつては職人の手を介し、使い手の体つきや癖など細かな注文に応じてつくられたり、何度も修理して大切に使用されたモノも、新調した方が安くて早いため、簡単に使い捨てられるようになりました。

しかし、ここ数年地球規模の環境保全意識の高まりから、モノを再利用するリサイクル運動が活発化し、牛乳パックやペットボトルなどから再生されたりリサイクル製品が多く出回ってきました。

また、モノを手入れする手段は、インターネットやカタログによる通信販売など、モノもヒトも介さずに行えるようになっています。

一方で、“手作り”、“限定品”、“オーダーメイド”といったモノにも人気が集まっています。利便性を追求してきた現在の社会は、同時につくり手の温もりが感じられるモノにもまた別の価値を求めるといふ二面性を持ち合わせているようです。

かつてのくらし

上のイラストは、昭和初期の静岡県東部の稲作農家を想定してその台所周りを再現したものです。女性や老人は和服を身につけ、竹や木材など自然素材の籠や桶をはじめ、職人の技術があらこちらにちりばめられています。では、どんなモノをどこの職人がつくったのでしょうか。

- ① 水屋みづや草くさ笥し ・ 建具屋けんぐい
- ② 染め物ぞめもの ・ ・ 紺屋こんや
- ③ キセルきせる ・ ・ 羅亭屋らてい
- ④ 鍋なべ ・ ・ ・ 鋳物師いぶつし、鑄掛屋ちゅうかけ
- ⑤ 篩ふるい ・ ・ ・ ・ 篩屋ふるい
- ⑥ 鋏くわ ・ ・ ・ ・ 鍛冶屋かじ、棒屋ぼうや
- ⑦ 籠かご ・ ・ ・ ・ 籠屋かごや（竹細工師）
- ⑧ 桶かじ ・ ・ ・ ・ ・ 桶屋かじ
- ⑨ 下駄げた ・ ・ ・ ・ 下駄屋げた
- ⑩ 竈かまど ・ ・ ・ ・ ・ 石屋いしや
(石造り)



▲鍛冶屋（平成12年、三島市）



▲桶屋（平成3年、富士市）

このほかにも、大工、畳屋など多くの職人たちの技が見られます。こうした職人の技術は、主にマチに集まっていた。ムラに住む人々は、日々の暮らしに必要ないろいろなモノをマチに求めました。下駄や足袋はもちらん、鍛冶屋へ寄って使う人やその土地にあった鋏を注文したり、桶屋へ寄って壊れた桶の修理を頼んだり、時には嫁入りする娘のために櫛や簪を調えたのかもしれない。

職人の技術は、マチやムラのたくさんの人々から必要とされ、またその技を惜しみなく提供してきました。イラストに見られるようなかつてのくらしには、このような職人の技術があらゆる場面に介在していたといえるでしょう。

職人の修行・生活

戦後まで、職人を目指す者は、高等小学校や、新制中学を卒業するとすぐに職人の親方のもとへ弟子入りしました。親方の家に住み込み、徴兵検査までおよそ5年間職人見習いとして修行しました。食事と着物が与えられ、掃除から、仕事の下準備など、先輩の言うままに働き、仕事を覚えます。

仕事に追われる中で、唯一の息抜きは毎月1日・15日の休日でした。年季奉公の見習い職人達もおこずかいをもらい、町へ遊びに出ます。映画館へ行くのが楽しみだったといいます。

約5年間の見習い期間が終了すると、1~2年お礼奉公して一本立ちしました。しかし、職人の技術の奥は深く、優れた親方の下に入り、さらに技術を磨いたり、あるいは火災・地震などで仕事が増えたところへ移り住むなど、居所を定めない職人も数多くいたものです。

職人は長年の修練の中で磨いた技術で評価されます。このため職人を志すものは技術習得のために隠れた努力をしています。「技は目で盗め」といわれ親方や先輩の仕事を手伝いながら見よう見まねで技術を覚えました。街道を旅する一宿一飯の「まわり職人」から技術を学ぶこともありました。

また仕事に使用する道具は自ら製作したり、自分の使い勝手のよいものを特注して大事に長く使用しました。「道具を見ればその腕がわかる」と言われ、良い道具をそろえるのが職人の身上でした。このように職人は良い仕事をすることに誇りを持ち、採算度外視で仕事に取り組むことも多かったようです。

職人の信仰

建築関係の職人達は、聖徳太子を職人の神様として信仰しています。長さを決める曲尺かねじやくを発明したのが太子と信じられています。三島広小路蓮馨寺と沼津千本長谷寺の太子堂では正月・五月・九月の11日に建築関係の職人が集まり「太子講」を催し、本尊聖徳太子像にお経を上げます。五月の太子講は特に賑やかに催されています。富士でも職人組合が五月に集まり太子講を行っています。

職人個人が太子を信仰し太子木像や掛け軸を飾ることも広く見られました。

この他、紺屋かじや（染物屋）は愛染明王あいぜんみょうおうを信仰し、毎月26日におまつりし、紺屋仲間で愛染講を催しました。

鍛冶屋は金山様かみすきを祀り、正月2日の初打ちには剣を打ち金山様に奉納、11月8日のふいご祭りはごちそうを用意します。また、紙漉職人は蔡倫講を催しました。



◀三島 蓮馨寺
太子堂
太子講(5月11日)

三島の建築関係の職人達が
大正11年(1922)建立したもの。
職人の技術を結集している。



沼津・三島・伊豆長岡
畳職人組合の太子像



三島傘組合の
太子講掛け軸

沼津 長谷寺▶
太子講(5月11日)

現在の本堂は昭和27年(1952)沼津の建築関係の職人達が労力を提供し、聖徳太子堂として建てたもの。

